The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教養としての国語 ： 高知高専における取り組みを例に
Author(s)	永原, 順子
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教養としての国語
～高知高専における取り組みを例に～

永原　順子

1. はじめに

2009 年度から 2016 年度の 8 年間、筆者は高知工業高等専門学校（以後：高知高専）に国語科の教員として勤務した。本論文は、高知高専という 1 つの現場を通じて国語教育のあり方を模索した結果をまとめたものである。

総じて、教育は指針に沿って行われるが、一方で制約や条件などが必ず存在し、それらを調整して行う必要がある。また、教員各々の研究内容とどのように関わらせていくのかという課題もあるだろう。今回、高知高専での国語教育をそのケーススタディの 1 つとしてとらえることで、国語という科目を「教養」として見つめなおす機会を得ることができた。

ここで述べる「教養」とは何か。文部科学省の中高教育審議会によると、「教養とは、個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体ということができる。」とある[1]。また、最近では「教養」を意味するリベラルアーツという言葉もよく聞かれるようになった。リベラルアーツとは、もともとはギリシャ・ローマ時代からルネサンス期にかけて一般教養の基本となった自由七科をさし、「人を自由にする学問」であるとされる。

国語では、input（読む、聞く）、output（書く、話す）を繰り返しながら言葉の力を身に着けることで、さらに input、output の能力を向上させることが重要であると考える。その能力は、新たな世界を理解し、自ら何かを創造し、それを発信することを可能にするからである。あらゆる領域を学ぶための基礎力と言ってもよいだろう。この基礎力は上記にあげた「教養」を手に入れるためにかかせない力である。もっといえばそれは「教養」そのものなのかもしれない。

以上の見解をもとに、国語教育のモデルケースを以下に述べることとする。

2. 高専教育の指針と制約

2.1　高専のカリキュラム

高専とは、中学校卒業後、5 年間の課程で機械・電気・化学・建築土木などの工学を専門に学び、優れた技術者を育成する高等教育機関である。課程修了後は準学士の称号が授与される。高専卒業後は、製造業を中心とした一般企業への就職、4 年制大学の 3 年次へ

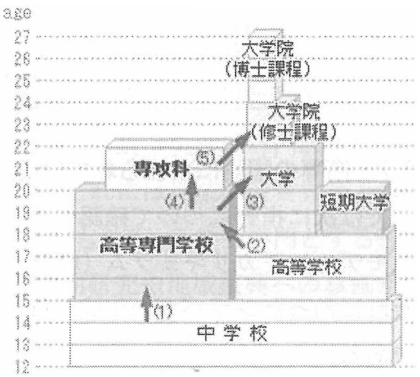

図 1　高専卒業後の進路模式図
（高専機構 HP より引用）

の進学（編入学）、さらに高度な技術教育を行う 2 年間の課程である高専専攻科への進学、などが選択できる（図 1）。なお、高知高専では、就職が約 7 割、大学・専攻科進学が約 3 割となっている。一部、都市近郊の高専では進学を希望する学生が多数を占めることもあるが、大半の高専では就職を選択する学生が多くなっている。

高専の数は全国で 57 校（国立 51 校、公立 3 校、私立 3 校）と少ないが、日本の各県にほぼ 1 校ずつ存在している。また「ロボコン」などがニュース等で取り上げられることもあるので、高専という存在をご存じの方は多いだろう。ただ、高専がどのような教育機関なのかについてはあまり知られておらず、技術者を育成するという点から、専門の学問のみを学習しているというイメージを抱く方が多い。実際、「高専でも国語や社会を勉強するんですね」と驚かれることがよくある。確かに、普通科高校と比べ、1 年次から専門に関する単位を履修することもあって、人文科学系科目の単位数は英語を除くすべての教科で圧倒的に少ない。（表 1）。

年次ごとの国語科の週当授業時数は、表 2 の通りである。授業時間は 90 分を基準とするが、実際は中間に 5 分の休憩時間を挟んで 45 分ずつに分けている。授業時数は 45 分の講義を 1 とする。よって 3 単位の国語 I は、90 分の講義 1 回と 45 分の講義 1 回を行うことになる。

表 1　高知高専 29 年度　カリキュラム（1 年次）

区分	授業科目	単位数	週当授業時数 1年 前	週当授業時数 1年 後
一般	国語I	3	3	3
一般	現代社会	2	2	2
一般	基礎数学IA	2	4	
一般	基礎数学IB	2		4
一般	基礎数学IIA	2	4	
一般	物理I	2	2	2
一般	化学I	2	2	2
一般	音楽	1	1	1
一般	美術	1	1	1
一般	基礎英語IA	2	4	
一般	基礎英語IB	2		4
一般	英語表現I	2	2	2
一般	保健・体育IA	2	2	2
一般	地理	2	2	2
一般	基礎数学IIB	1		2
一般	保健・体育IB	1	1	1
専門	情報処理	2	2	2
専門	デザイン工学演習I	2	2	2
専門	ソーシャルデザイン入門	1	1	1

表 2　高知高専 29 年度　国語科 週当授業時数一覧

授業科目	履修年次	週当授業時数	教材対象
国語 I	1	3	現代文・古典
国語 II	2	2	現代文・古典
国語 III	3	2	現代文
日本語表現	4	1	—

2.2　高専の国語に求められているもの

では次に指針について確認する。各科目の到達目標を明らかにするため、国立高専機構[2]はモデルコアカリキュラム（以後、MCC）の試案を 2011 年度末に作成しており、各高専ではそれに沿ったシラバスの作成が行われている[3]。MCC における国語の到達目標は以下の通りである。

【準学士課程における教育領域の到達目標：国語】

・ 読む・聞く・書く・話す・考えるという日本語の能力を有機的に連携させつつ育成す

ることにより、社会において求められる論理的かつ多角的な理解力、柔軟な発想・思考力、豊かな口頭表現を含む効果的なコミュニケー

ション能力、および主体的な表現意欲を培う。また、古典を含む文学的な文章の鑑賞をとおして日本の言語文化についての理解を深め、感受性を培う。

・ 近代以降の文章のうち、論理的な文章を客観的に理解する能力と、文学的な文章を多角的に鑑賞する能力とを伸ばすとともに、視野を広げ感受性を磨こうとする主体的な態度を培う。

・ 古文・漢文にふれ、中国文化との関係を含む日本文化への理解を深めるとともに、それらに親しもうとすることができる。

・ 日本語で情報を収集・選択・構成し、論理的かつ効果的に双方向的コミュニケーションをとることができる。また、論理的かつ多角的な理解力、柔軟な思考・発想力、豊かな口頭表現を含む効果的なコミュニケーション能力、および主体的な表現意欲を培う。

上記到達目標に関する具体的な学習内容は、現代文、古文・漢文、コミュニケーション、の 3 項目に分けられており、項目ごとに到達目標がさらに細かく設定されている[4]。

一見したところ、内容に関しては、高等学校学習指導要領における「国語総合」と「国語表現」の要素を統合したものに近いといえる[5]。しかし決定的な違いは、2.1 で述べたようにその過程の違いにある。高専は 5 年間の課程であり、大学の 1,2 年次に相当する部分を含み、専門教育の充実とともに全人的教育が望まれている[6]。卒業後の進路が進学であっても就職であっても、学生にとっては高専が「国語」を学ぶ最後の機会となる可能性が高い。すなわち、高校で学ぶ基礎学力としての「国語」と、その上に積み上げていく教養としての「国語」の、どちらも視野に入れねばならない。近年、高専のみならず大学等の高等教育機関において、一般教養あるいはリベラルアーツについての議論が盛んである[7]。リベラルアーツを学ぶとはどのようなことか、国語科なりに答えを出す必要もある。

2.3 高専の研究および教育のあり方

次に、国語科のみならず高専全体で求められる研究および教育の方針について触れたい。

はじめに、地域連携についてであるが、高専機構には地域イノベーション推進本部が設けられ、産学共同教育の実践が進められている。基本理念としては、「実践的専門教育による「実践的・創造的な技術者」の養成」が掲げられている[8]。これには地域の産業界等と幅広い連携を行い、同時に高専の認知度を向上させるという目的もある。工学を専門とする教員はもちろんのこと、一般科目を担当する教員も企業との共同研究や地域振興への参画が望まれている。

さらに、専門を超えた学際的研究の推進も求められている。特に専攻科では、「学際・複合科目の開設や異なる専門分野が融合した課題設定型学習（PBL）により、複眼的視野やマネジメント能力、経営感覚の育成を重視している」教育を実施しており[9]、教員は各自の専

門を軸として広く学際的研究および教育を行うことが必須となっている。

3. 国語科における取り組み

以上までをまとめると、取り組むべき課題は次のようになる。

・限られた時間数の効果的な使用

・地域連携教育への取り組み

・学際的研究および教育

これらを踏まえたうえで、卒業後の学生の成長に必要かつ不可欠である技術・基礎知識を学ばせる一方、2.2 で述べたような教養としての国語のあり方も検討していかねばならない。すべての課題を達成できたとは言えないが、一般科（教養科目）の教員をはじめとして、他専攻所属教員の協力のもと、国語教育に関する様々な工夫を行ってきた。以下、いくつかの項目にわけて実践内容をまとめる。

3.1 授業における教材や評価について

まず教材（表 3）についてであるが、教科書に関しては高校の検定教科書を使用している。これも高知高専独自の教科書を作る必要があると考えており、今後の課題としたい。

表 3　高知高専 29 年度　国語Ⅰ　教材と到達目標

教科書 教材	教科書 「国語総合」（東京書籍） 参考書 「クリアカラー国語便覧」（数研出版） 問題集 「パスポート国語必携　三訂版　国語常識の演習と確認」（桐原書店） 「赤チェックシート付漢字検定　準２級」（高橋書店） 「小倉百人一首暗唱ノート」（京都書房）
到達 目標	1. アウトプット：思考した結果を他者に分かりやすく伝え、議論することができる。また、論理的に文章を構成し、適切な言葉を用いて自らの考えを説明できる。 2. インプット：言葉の知識（語句・漢字を理解する）を増やし、文章表現のなかで正しく使うことができる。

参考書としては、これも高校でよく採用されている「国語便覧」を採用し、主に古典分野の副読本として活用している。

問題集の「パスポート国語必携」は、日本語の語彙や文法の基礎知識を自習できるものとした。普段の学習だけでなく、長期休暇においても課題として使用が可能である。この「国語必携」と次の「漢字検定」の問題集は、45 分授業の際に範囲をあらかじめ指定して小テストを行い、学生の国語基礎力（語彙・漢字）向上を目指している[10]。

もう 1 冊の「小倉百人一首暗唱ノート」であるが、これは限られた時間の中で古典にふれるための策である。和歌は 31 文字という限られた文字数でありながら、様々な修辞法を使って 1 首に 1 つの世界を詠み込むことが可能である。それらの内容を理解しながら暗唱することは、様々な古典の物語に出会うきっかけとなる。これも定期的に小テストを行い、毎年 1 月には授業時に百人一首の競技カルタを行っている[11]。事前に江戸文化から端を発した競技カルタの歴史について学び、日本文化理解を深めている。

授業時は、アクティブラーニングの手法を多く取り入れ、学生同士の協力によって教材（現代文・古典）をより綿密に味わうことに努めている。グループ学習によるポスター発表、PowerPoint によるプレゼンテーション、ビブリオバトル[12]なども行い、修了時には必ず相互評価を実施し、次回の授業へフィードバックさせている。

評価は、MCC を基にして策定したルーブリック評価を行っている（表4）。評価項目はカリキュラムやシラバスとともに web で公開されており、学生が各々の到達度を常時確認できるようになっている。

表4　高知高専29年度　国語Ⅰ　ルーブリック評価

評価（ルーブリック）

	理想的な到達レベルの目安（優）	標準的な到達レベルの目安（良）	未到達レベルの目安（不可）
評価項目1	思考した内容を分かりやすい言葉で発信し、議論した内容を的確にまとめることができる。	思考した内容を発信し、議論することができる。	思考した内容を発信できず、議論することもできない。
評価項目2	漢字、語句を理解し、自らの文章表現のなかで積極的に使うことができる。	漢字、語句を理解し、文章表現のなかで正しく使うことができる。	漢字、語句の理解が十分でなく、文章表現のなかで正しく使うことができていない。

課題点としては、実習系科目や語学力であれば、資格の有無、外部試験（TOEIC 等）の点数で明確化できるが、「教養」の到達度は明確に示しがたいことが挙げられる。そのため国語のルーブリック評価においては、日本語表現に関する能力、すなわち漢字や語彙の習得度、プレゼンテーション力などの実用的な能力の評価のみにとどまってしまう傾向がある。この点については改善する必要があるだろう。

3.2　授業時間数の効率的な利用

2.1 で述べたように、カリキュラムの中で国語に割り当てられた時間数は限られている。例えば1年次の国語は、週に90分の講義が1回、45分の講義が1回、である。2016年度から新校時表が施行されるまでは、50分授業が週に3回行われていた。変更に伴う問題点としては、次のようなものが想定された。

①根本的に時数が少なく、計画したシラバス通りに授業を実施できない。

②50分授業に慣れていた中学生が、高専の90分授業にすぐに順応できない。

③週に2日しか国語の授業がないことによって、学習内容が定着しにくい。

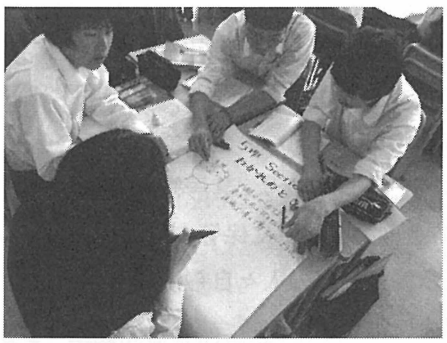

図2　アクティブラーニングの様子

①に関しては、不足するからといって簡単に増やせるものでもなく、その時間数の中で工夫をするしかない。2016年度の前期では50分授業をもとに授業を構成していたので、進度の調整に困難を極めた。しかし、説明～実施～終了と、ある程度まとまった時間が必要となるアクティブラーニング（図2）を実施する際には90分授業が最適であることを実感

してからは、90 分はアクティブラーニング、45 分は語彙の小テスト、と 2 種類の時間を効果的に使い分けることができた。また、90 分授業では、校用車のバスを使用して近隣の史跡や歴史的建造物を見学に行くことで、次項で述べる地域連携へとつながる地域学習を実施することができた。それらによって、②の問題も同時に解決の方向へと向かった。むしろ 45 分の講義の方が授業時間としてはかなり短く、綿密な授業準備を行う必要があることが判明した。今後も更なる改善が必要である。一方③は、2016 年度当初は教員も学生も戸惑いがあったが、授業開始後に前回のキーワードを確認しながらの復習を行うことで克服できた。今年度は予習を中心とした反転授業を行い、さらに学習内容が定着するよう努めている。

3.3　地域連携とのリンク

ここで視点を変えて、筆者の研究と教育の接点について報告していくこととする。

筆者の専門は、様々な文化事象から人々の信仰心や思想を分析するという宗教民俗学であるが、高知高専が位置する南国市の隣に位置する香南市赤岡町もそのフィールドの一つとしている。高知県内では、絵師金蔵（通称：絵金）が描いた歌舞伎の芝居の屏風絵を夏祭りの夜に軒先へ飾るという風習が 10 数か所に残っている。絵金は幕末の高知に生まれ、晩年は赤岡にあった親類の家に身を寄せたこともあり、多くの芝居絵が赤岡の夏祭りを彩ることとなった。町の北に位置する須留田八幡宮の神祭において、幕末に絵金の芝居絵を氏子の家々の軒先に飾る風習が始まり、今でも毎年 7 月 14, 15 日の夜に行われている。それにならい、1977 年に赤岡吉川地区商工会の青年部が商店街の発展を願って始めたものが「絵金祭り」で、毎年 7 月の第 3 土日に絵金の芝居絵屏風が商店街に飾られ、市民のための賑やかな催しが多数行われている（図 3）。

図 3　絵金祭りの様子

図 4　絵金蔵

図 5　弁天座

商店街のほど近くの路地には絵金蔵（図 4）と弁天座（図 5）が向かい合って建っている。絵金蔵は芝居絵の保管と展示を目的として 2005 年にオープンした[13]。芝居絵は神祭と絵金祭りの夜のみ持ち主の手に戻り、それ以外の期間は絵金蔵の収納庫に保管される。

また、1993 年の絵金祭りから、芝居絵に描かれた歌舞伎を町の人々自ら演じる「土佐絵金歌舞伎」が行われていた（図 6）。それから 10 年以上、毎年臨時の舞台で演じられていたが、2007 年からは復活した弁天座で演じられている[14]。

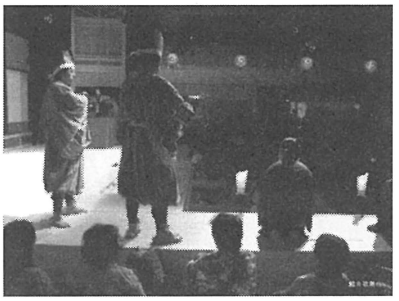

図 6　土佐絵金歌舞伎

2009 年 4 月に高知高専へ赴任してから、筆者は毎年赤岡の絵金祭りに関する調査を行ってきた。それと並行して、機会があるごとに注の 11 で言及した日本文化研究同好会の部員を絵金蔵や弁天座の見学および弁天座のイベントのボランティア活動に参加させていた。2016 年に伝承会の人々から声をかけていただき、部員の数名が役者として「土佐絵金歌舞伎」の舞台に 2016 年、2017 年と 2 度にわたって立たせていただくという栄誉を得た。正規の授業ではなく、課外活動ではあるが、実際の伝統文化に触れることが非常に困難な状況にある中で、学生にとってたいへん貴重な機会となった。

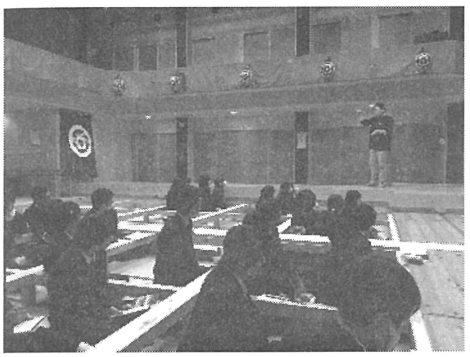

図 7　弁天座見学の様子

また、前項でも少し触れたが、1 年次の 90 分授業の際、校用車のバスを使って 1 クラスずつ弁天座の見学を実施した（図 7）。絵金祭りの歴史について事前学習をし、当日は「弁天座でイベントを企画するとしたら？」という目的意識を学生に持たせて見学を行った。見学後の授業では、「弁天座で〇〇企画！」をテーマとして班ごとにブレーンストーミングを行い、最後は班の代表者によるプレゼンテーションを実施した。

また、2 年次の国語担当の佐藤元紀教員は、同じく 90 分授業の際に、紀貫之が国司として滞在したとされる土佐国衙跡を見学し、同史跡の観光マップ案を班ごとに作成させている。

本項の見出しは地域連携としたが、上記のいずれもがシーズの段階である。日本文化研究同好会によるボランティアは、正しく言うならば地域貢献であり、共同研究には発展しがたい。ただ、弁天座の運営や土佐絵金歌舞伎に携わる人々たちは、多くの若者が弁天座の活動に参加し、地域の伝統を守っていくことを強く希望している。学生たちにとっての弁天座での体験は生の日本文化に触れられるまたとない機会であり、それが今まで学んだ国語の知識へとフィードバックされるならば、冒頭で述べたような教養としての国語力を一つ手に入れたと言えるであろう。それら相互作用を地域連携と捉えることも可能である。

また、弁天座でのイベント企画や史跡の観光マップ作成は、いわゆる PBL の一歩目の作業であるが、将来的にはこれらのシーズをもとに実際に弁天座や南国市に働きかけ、地域連携を強化していきたいと考えている。

3.4　学際的研究の推進

本項では、地域連携とともに、学際的研究を行った例を報告する。

図 8　絵金蔵　展示室

前項で述べた絵金蔵は、芝居絵の保管と展示を行っているが、ある展示室では祭りの夜の雰囲気を再現しており、室内が暗いため、展示物の解説が読みづらいという問題があった（図 8）。そこで高知高専の環境都市デザイン工学科の村本真教員との共同研究により、iPod touch で暗い中でも解説が確認できる「Touch the Ekin」アプリを作成した（図 9）。2010、2011 年度の村本研究室卒業研究生とともに同アプリを開発し、2012～14 年度は、iBooks Author を用いたアプリを作成して、現在は iPad での使用が可能となっている。試験運用の際、来館者へのアンケートを行い、何度かの改良を経て現在に至る。

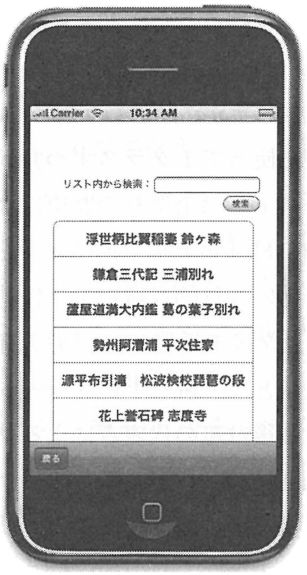

図 9　Touch the Ekin

将来的には、このアプリを有形無形の文化財データベースを活用した地域の活性化にむけて発展させることを予定している。それらを絵金蔵で使用したり、小中学校で活用したりすることが可能になれば、情報教育および地域学習への貢献が期待できると考えている。

また、場所は変わるが、今の南国市出身でからくり技術の発展に寄与した幕末の偉人、細川半蔵にちなんで、機械工学科の赤松重則教員とともにからくり人形レプリカの開発を実施している。上記のアプリと同様、卒業研究の一環として学生にも取り組ませ、日本高専学会での特別企画において報告を行った[15]。

上記の共同研究に関わる卒業研究に取り組んだ学生たちは、「近所にこんな歴史的建造物があることを初めて知った」「自身の研究が現在の社会貢献に直結することにやりがいを感じた」「伝統は古くてつまらないものだと思っていたが、研究してみると意外と面白く、興味がわいた」と述べている。学生たちは、自ら学び、地域で生の文化に触れる体験をし、それを生かしてさらに研究を深める、というプロセスを実感したからこそ、このような気づきに至ったのであろう。そこには、無自覚とはいえ、国語の、そして教養の基礎力である input と output の力が一役買っているのではないだろうか。

4.　おわりに

以上、高知高専における 8 年間の国語教育を概観してきた。もちろん克服するべき課題も多い。最も大きな課題は、知識の集積である。冒頭にもあるように、教養には「経験」だけではなく「体系的な知識と知恵」が不可欠であるからだ。

例えばアクティブラーニングで意見交換は活発に行えても、ただ「楽しかった」で終わってしまう危険性がある。反転授業による緻密な情報収集とその理解を学生に行わせる手立てについてはまだまだ改善しなければならない。「経験」と「知識」がバランスよく組み合わさってこそ教養としての国語力は向上すると考えている。

今年の9月、岡山にて、高知高専と本学の学生が学術交流を目的とした研修を行った。また、来年度には、本文でも触れたビブリオバトルを通じての交流も予定している。異なった環境で各学生が身に着けた「教養」を互いにぶつけあい、それを共有していくことで発見することも大いにあるであろう。その発見もまた、「教養」の肥やしとなることを期待する。今後も高知高専の教員と協力し、国語教育のあり方を模索していきたい。

〈謝辞〉本研究は、株式会社坂本技研（高知県南国市）との共同研究「学際的視点を持たせる地域連携教育研究」(研究期間:2017年11月1日～2018年10月31日)を中心に今後も継続する予定です。この場を借りて御礼を申し上げます。

【参考文献】

須藤秀紹（編集）、粕谷亮美（編集）、『読書とコミュニケーション ビブリオバトル実践集』、子どもの未来社、2016

高浦勝義、『絶対評価とルーブリックの理論と実際』、黎明書房、2004

谷口忠大、『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』、文春新書、文藝春秋、2013

Dannelle D. Stevens（原著）、Antonia J. Levi（原著）、佐藤浩章（翻訳）、井上敏憲(翻訳)、俣野秀典(翻訳)、『大学教員のためのルーブリック評価入門（高等教育シリーズ）』、玉川大学出版部、2014

ビブリオバトル普及委員会、『ビブリオバトル ハンドブック』、子どもの未来社、2015

---

[1] 文部科学省　新しい時代における教養教育の在り方について（答申）案　第2章　新しい時代に求められる教養とは何か　冒頭部分　　文部科学省HPより引用
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1343927.htm

[2] 正式名称は、独立行政法人国立高等専門学校機構。国立高等専門学校（高専）を設置・運営するため、平成16年に設立された。

[3] 平成23年度末、国立高専機構は、産業界や大学関係者との緊密な協力関係の下に、高専卒業生が社会及び産業界で活躍するために、教育の量から質保証への転換を図る、モデルコアカリキュラム（試案）を策定しました。

モデルコアカリキュラムとは、国立高専のすべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容である「コア（ミニマムスタンダード)」と、高専教育のよ

り一層の高度化を図るための指針となる「モデル」とを提示するものです。
高専機構 HP より引用　http://www.kosen-k.go.jp/mcc-20120419.html

[4] 「モデルコアカリキュラム（試案）」p.39　高専機構 HP より引用
http://www.kosen-k.go.jp/pdf/mcc20120323.pdf

[5] 「高等学校学習指導要領（ポイント、本文、解説等）」　文部科学省 HP より引用
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304427.htm

[6] 市坪誠、小林淳哉、藤田直幸、堀内匡、黒田大介、角野晴彦、「国立高専機構における技術者教育の質保証その 1　―高等教育としての質保証のあり方―」、社団法人日本工学教育協会　平成 23 年度工学教育研究講演会　講演論文集、p.528、2011

[7] 今年、2017 年 9 月に行われた日本高専学会の第 23 回年会講演会のテーマは「高専の教養教育 ―リベラルアーツが高専を面白くする―」であり、口頭発表やポスターなどで活発な議論が行われた。リベラルアーツが学べることを特徴にあげる大学も各地に存在する（国際教養大学 AIU 、国際基督教大学 ICU など）。

[8] 「地域イノベーション推進本部　産学共同教育関係」　高専機構 HP より引用
http://www.kosen-k.go.jp/chizai/sangaku.html

[9] 独立行政法人国立高等専門学校機構　高専の現状・課題と「第 2 期教育振興基本計画」への期待　文部科学省 HP より引用
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo9/shiryo/attach/1319797.htm

[10] 漢字検定に関しては、年に 1 回高知高専を準会場として、希望者を対象とした漢字検定を行っている。1 年生で準 2 級、2 年生で 2 級の合格を目指す。準 2 級合格で 1 単位、2 級合格で 2 単位、最大 2 単位までが卒業単位として認められている。

[11] 1 年生で 1 ～50 番、2 年生で 51 番～100 番の暗唱を目指す。この取り組みは、2005 年頃から始まって今も継続している。百人一首の競技カルタをテーマとした漫画『ちはやふる』（末次由紀、講談社、2007 年～『BE・LOVE』連載中）が流行したこととともあいまって、2011 年に学校行事のクラスマッチ（バレー、サッカーなど）の競技の種目に取り入れられ、2013 年には競技カルタの活動を主とした日本文化研究同好会が発足した。

[12] 各自が人に薦めたい本を持参し、5，6 人のグループに分かれて 5 分ずつのプレゼンテーションを行い、そのグループの優勝者を決めるというもの。PowerPoint に頼らない伝達力を磨く機会となる。

[13] 常設展示には芝居絵のレプリカを使用している。作品本体の展示は 1 点のみで、絵の保存のため、定期的に入れ替えを行っている。

[14] 弁天座は明治期に地元の有志が建てた芝居小屋であったが、1970 年に閉館していた。2007 年に赤岡の文化活動拠点として復活。絵金歌舞伎のほか、松竹歌舞伎、落語会、映画鑑賞会、各種講演会などの自主興行も行われている。

[15] 永原順子、赤松重則、「機械工学と地域文化学の融合を目指して」、『日本高専学会誌』Vol.22 No.4、p.41~46、2017